

5. 湖産アユ種苗性向上試験費

1) アユの冷水病、シュードモナス病の発生状況

二宮浩司

【背景】近年、アユ養殖場では冷水病やシュードモナス病が多発し、大きな被害が出ている。

【目的】両疾病に対する疫学調査を実施し、発病条件の検討を行い、養殖場での被害軽減のための基礎資料を得る。

【成果概要】

平成8年アユ年度（平成7年11月～平成8年10月）の魚病診断カルテを取りまとめた。

1. 発生状況：冷水病、シュードモナス病ともにほぼ周年発生した。
2. 症 状：（冷水病）鰓・内臓の貧血が主な症状であり、躯幹や尾部に潰瘍症状を示すものも多かった。その他、下顎に出血や潰瘍症状を示したり、出血性の腹水貯溜を示すものもいた。
（シュードモナス病）主な症状は出血性の腹水貯溜と鰓の軽い貧血であり、その他、内臓の点状出血や肛門の発赤・拡張を示すものも多かった。
3. 池入れ後、発病までの日数（図1）：（冷水病）池入れ後1ヶ月以内といった早期に発病することが多かったが、100日以上経ってから発病することもあった。
（シュードモナス病）19日目以内に発病する事例はなかった。多くは30日目以降に発病した。
4. 飼育池の水温（図2、3）：（冷水病）23℃でも発病した事例があったが、大半は、12.5～17.5℃の範囲内であった。
（シュードモナス病）11～22.5℃の範囲で発病したが、日間へい死率2%以上といった被害の大きな症例を見ると、15℃未満での発病事例はなかった。
5. 給 餌 量：給餌過多がシュードモナス病を誘引したり被害を大きくする傾向にあった。
6. 日間へい死率（図4）：冷水病、シュードモナス病ともにばらつきが大きかった。
7. 薬剤感受性：（冷水病菌）スルフィソゾール、フロルフエニコール等が高い感受性を示した。

（シュードモナス病）高い感受性を示す薬剤は少なかった。

【成果の活用】冷水病の場合、加温処理や投薬により被害を抑えてきた。一方、シュードモナス病の場合は治療効果のある薬剤がなく、予防に重点を置かざるを得なかった。また、飼育管理条件が被害規模を左右させる傾向にあった。

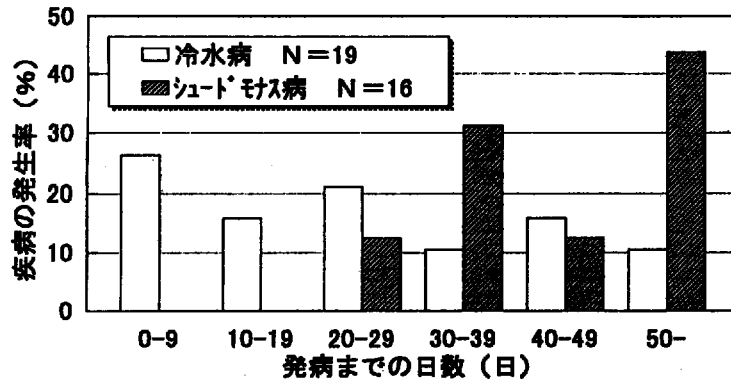


図1. 冷水病、シュードモナス病の発病までの日数別発生状況

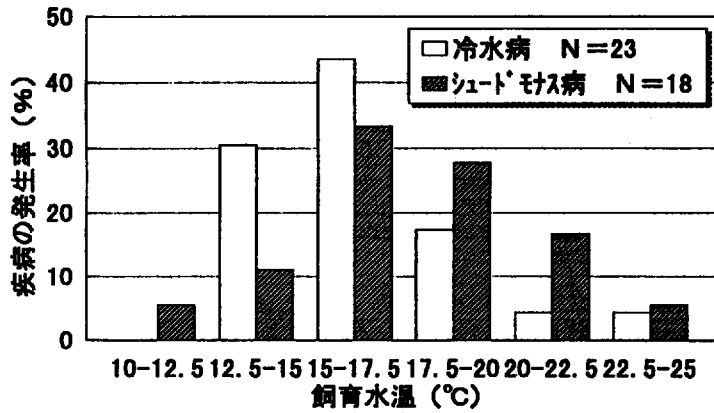


図2. 冷水病、シュードモナス病の飼育水温別発生状況

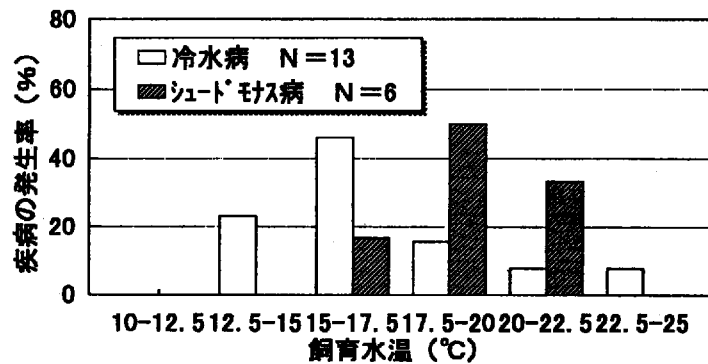


図3. 冷水病、シュードモナス病の飼育水温別発生状況 (日間へい死率2%以上)

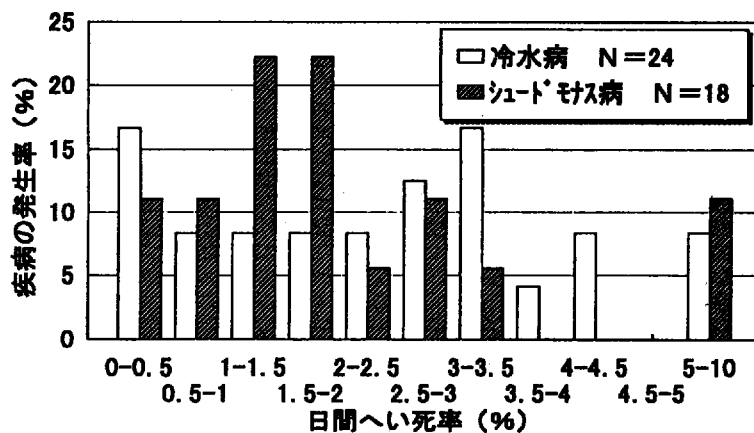


図4. 冷水病、シュードモナス病の日間へい死率別発生状況